新しいコレクション

北原千鹿《羊》

北原千鹿（1887-1951）
《羊》

1928年
銀、彫金
高さ21.5, 幅30.0, 奥行11.0cm
平成25年度購入
撮影：アローアートワークス

銀の板金（はんきん）をくるりと曲げて、羊の頭、首、胴や脚といった各パーツを作り、それらを組み合わせて構成した作品です。体を覆う長い羊毛は、板金の端に無造作に入れた切り込みで表されています。その先端には、不思議な「の」の字（を上下左右反転したような）模様が、たどたどしい線でつけられています。角や垂れ下がった尾、あるいは各パーツ同士は、鋲（びょう）で支柱となる板金に留められ、自由に制作されている印象を受けます。おまけに、羊の表情も漫画チックです。

子どもの頃の工作の時間を彷彿とさせ、親近感を覚える本作が、「戦前の第九回帝展で特選を受賞し、当時としては非常にセンセーショナルなものでした。」といわれると少々意外に思われるかもしれません。

工芸品というと、どんなふうに作られているのか、一見しただけではその技術や構造が推測しにくいものが多いなか、本作は、全体がどう構成されているのか隠そうともしていません。随分と開けっぴろげです。巧みさとは無縁で、あえて構造を見せようとする感さえ漂っています。

作者の北原千鹿（本名・千禄）は、香川県高松に生まれ、東京美術学校で彫金を学びました。卒業後は東京府立工芸学校（現・東京都立工芸高等学校）で教鞭を執りましたが、折しも時代は、個人から社会へ、芸術から生活へという流れのなかで「工芸時代の到来」といわれた変革期にあたっていました。新しい工芸を打ち立てるという使命感をもって、作家活動に専念するため、北原は大正十（一九二一）年に工芸学校を退職。第四部美術工芸部門が新設されたばかりの第八回帝展（一九二七年）から、三年連続して出品作が特選を受賞しました。本作はこの三作品のうちの一つです。

教職経験があった北原は、より若い世代に対し指導的な役割を果たしました。北原を中心にして昭和二（一九二七）年に結成された工芸の作家団体「工人社」は、機械的な要素を取り入れた構築的な制作で知られ、会員の作品は「メカニックな美、構成的な美を意識することによって成された」と評価されていました。こうした若い工芸家たちを作品や制作を通して牽引していったのが北原千鹿だったのです。

当時の批評家に「芸達者」と言われた北原が、新しい工芸のために本作で如何にその「芸」を消し去ろうとしているかを知るには、本作の翌年に昭和天皇への献上品として制作された《羊置物》（一九二九年、宮内庁三の丸尚蔵館蔵）を見るのがいいでしょう。銀の細かな打ち出しで、動物の肌合いを表現した細部に至るまでの写実表現には、ただただ息を呑むばかりです。芸のかわりに構造を見せることこそ、この時代の切なる要請だったのです。

（工芸課主任研究員　北村仁美）